

氏 名	まつ 松 浦 雄 介
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 274 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	記憶の社会学 ——不確定性について——

論文調査委員 (主 査) 教授 松 田 素 二 教授 寶 月 誠 助教授 落 合 恵 美 子

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、現代社会における個人の記憶について、現代日本文学の諸作品の読解をつうじてあきらかにすることを目的としている。

変化を常態とする近代においては、過去はたえず消滅の危機にさらされる。近代以降、喪われたものを記憶においてとどめようとするノスタルジーやメランコリーなどが社会的に広まったり、学問から大衆文化まで、消滅の危機に瀕した伝統や文化を記録・保存してアイデンティティを回復しようとする試みが相ついだ。

しかし今日、過去の喪失を危機ととらえる感覚は、なくなったわけではないにせよ、かつてほど強くないようにも見える。たとえば現代文学を見わたすときに気がつくのは、しばしば主人公たちの記憶が欠落していることであり、そしてまたその欠落が、かならずしもアイデンティティの危機をもたらすわけではなく、そのなかでもそれなりに生きられる様子が描かれていることである。後藤明生・古井由吉・村上春樹といった小説家たちの作品においては、主人公の記憶はつねに欠落している。あるいは津島佑子のように、記憶の欠落ではなく、過剰なほど鮮明な記憶を描く作家もいる。しかし記憶の欠落と過剰は、おなじ現代の傾向の表裏をなしている。それらは、過去から現在にいたる時間の一貫した流れが阻害され、過去がときには過大に、またときには過小に現在へ作用を及ぼすことからたらされる現在の生のゆらぎをあらわしている。

この過去からの把握しがたい作用による現在のゆらぎを、本稿では「不確定性」indeterminacyと呼んでいる。たがいに直接的な関係を持たず、独立した系列をなして存在している諸現象が、一つの網の目のなかで関係づけられることによって相互に規定しあう。一方の変化が他方の変化に影響を与え、さらにその変化が他の現象に影響を与え、そしてまわりまわってもとの現象が影響される。不確定性とは、複数の因果系列の相互作用のなかから、予測不可能な出来事が生成することによるゆらぎである。

本稿では、現代における不確定性の諸相について示すために、フロイトとベルクソンの理論をおもな導きの糸としながら、後藤明生・古井由吉・津島佑子・村上春樹という四人の現代日本の作家の諸作品を素材としつつ、記憶の様式と、それをつうじて形成される生のスタイルをあきらかにする。第一章で以上のべたような本研究の目論見と問題意識の概略を説明した後、第二章でフロイトとベルクソンの記憶の理論を検討し、つづく第三章から第六章まで、四人の小説家の作品を順に論じてゆく。以下に、第二章以降の各章の内容を紹介する。

第二章 記憶の不確定性——フロイトとベルクソン

本章では、フロイトとベルクソンの記憶論を現在の理論的文脈のなかに位置づけ、その現代的意義を考察している。フロイトによれば、記憶とは、つねに現在の観点から組み替えられ、書き換えられる記憶痕跡のネットワークをなしている。記憶は現在の偶発的な出来事をきっかけとして構成されるものであり、したがってそれは「事後の構成」のモデルと呼ぶことができる。本章ではこの構成モデルの含意を、その特徴がとくに顕著になるトラウマ論にそくして示した。また、ベルクソンによれば、フロイトとは逆に、記憶とは過去から現在へと働くものである。過去は潜在的な多様体をなしている。この過

去は、現在からの呼びかけにおうじて自分自身を現実化する。それゆえこのモデルは「潜在的なものの現実化」と呼ぶことができる。フロイトの「構成」とベルクソンの「現実化」は多くの点で対照的であるが、どちらも、記憶を外界から隔絶した内面的な現象と見なす従来の記憶観を脱し、記憶を行為と関連づけて考える新たな記憶のモデルを提示した点、および記憶と行為の関係の不確定性について理論化した点で共通している。

第三章 忘却と笑い——後藤明生

近代においては、あらゆるものが急速に変化し、過去はたんなる残余あるいは障害として洗い流されてゆく。この傾向は現代においても強まりこそすれ、弱まることはない。多くの近代小説が、この普遍的な忘却の力に抗して失われた時間を取り戻すべく書かれてきた。しかし、この忘却の力と対峙しつつ形成される個人の記憶と生のあり方は、近代から現代にかけて、少なからず変わりつつある。本章では、後藤明生の小説の読解をつうじて、この記憶と生の様式の現代的変容を明らかにする。それは近代小説と似ているように見えて、ちがっている。過去への関心はないわけではないけれども、しかしそれは失われた過去への執着というのではない。偶然浮かんできた問いに導かれるままに時空の迷路をめぐるが、想起されるのは記憶の断片ばかりであり、けっきょく現在の自分は過去の自分とすれ違う。この想起の不全性は、記憶の欠落のためというより、いくつもの記憶の流れが相互に干渉しあうために生じる不確定性に起因している。笑いはこのすれ違いから生じる。後藤明生における記憶の様式は断片的記憶の偶然的連鎖であり、そして生のスタイルは笑いである。

第四章 反復する身体——古井由吉

古井由吉の小説において、生と死、健康と病氣、理性と狂気、自律と依存といった二項対立的な価値は、つねにねじられている。対立する価値のあいだにある境界線は曖昧であり、それらの価値は相互に浸透し、その帰結は不確定である。本章では、このような不確定性のもとで生きられる生について論じている。相反する価値のせめぎ合いを自らの内で経験する主体は衰弱に陥る。この衰弱を克服しようとする試みは、意図せずしてよりいっそうの危機を招くため、衰弱は一種の防衛機制として肯定される。衰弱した主体は、みずからの行為を記憶のリズムにゆだねることができず、振動や癖として反復する。振動は外界を感受するときの微細な反復であり、癖は身体運動において無意識的に現れる運動の型である。だが反復＝振動＝癖は、記憶＝リズム＝スタイルの劣った次元、病的な状態なのではない。小説『杳子』をはじめとする古井由吉の小説が示すのは、記憶＝リズム＝スタイルを獲得することができるのは、反復＝振動＝癖を徹底することによってだということである。

第五章 成熟の探求——村上春樹

本章では、村上春樹の小説の読解をつうじて、現代社会における成熟の問題について考察している。近代以降、社会の発展は個人の発達と相関してとらえられ、近代化の過程はライフコースの比喻でもって語られてきた。経済「成長」、「発展」途上国、「成熟」社会、等々。しかし、現在の成熟社会の到来は、逆説的なことに、個人の成熟を困難なものにした。成長段階の社会においては、成熟とは既存の社会的な価値や規範をモデルとして内面化・同一化し、それをつうじて自己実現できる態度のことであった。しかし、社会が成熟段階に達するとき、そのようなモデルは多様化する。それゆえ成熟の過程も多様化する。このような状況のもとで成熟するためには、モデルとなるべき価値や規範を自ら選択しなければならなくなる。村上春樹の小説は、このような成熟社会における成熟の困難を示している。村上春樹の主人公を受動的たらしめていた主な理由は社会の複雑性である。複雑な因果の網の目のなかで出来事が生起するとき、その原因を知ることは容易ではない。出来事はつねに予測不可能なたちで生じ、理解不可能な部分を残す。それゆえ世界はつねに不確定である。この世界の不確定性のなかで成熟するとは、探求をつうじて、混沌として一貫性を欠いたように見える世界に因果的つながりを見出し、そのつながりのなかに自らを位置づけられるようになることである。このことを自覚するに至って以降、村上春樹は歴史と記憶に向かうようになる。歴史も記憶も、世界の複雑性あるいは不確定性にかかわる事物の多様な因果関係の流れそのものだからである。

第六章 記憶の充溢——津島佑子

上記の三人の作品において、記憶の欠落が見られたのにたいし、津島佑子的小説には非常に鮮明な記憶の想起が見られる。さまざまな社会環境の変化のなかでも、伏流しつづける記憶があり、それはどれだけ時間が経っても、細部にいたるまで——ほとんど過剰なほどに——鮮明に想起される。このような記憶の欠落と過剰とは、おなじ現代の傾向の表裏である。そ

れらは、過去から現在にいたる時間の一貫した流れが阻害され、過去がときには過大に、またときには過小に現在へ作用を及ぼすことからもたらされる現在のゆらぎだからである。本章では、過剰な記憶がもたらす不確定性のもとで生きられる生について、津島佑子の作品に依拠しつつ考察している。津島佑子における記憶は、一見するとノスタルジーに見えるものも少なくない。しかしそれは二つの点でノスタルジーとは異なっている。第一に、津島佑子には過去と現在の質的な分離がなく、過去が具体的な場所とイメージに結びつくことによって、いつまでも鮮明に想起される点。第二に、それは懐かしく美しい記憶のみならず、トラウマ的な記憶や不可解な記憶も想起される点。そのような記憶は、夢や妄想とあいまって、現在の現実のなかに共存している。それらの非現実的なものが主人公にとって重要なのは、それらが感情の充溢をもたらすからであり、そしてまた行為を促すからである。

本稿の目的は、現代の不確定性のもとで生きられる主体の経験を解明することにあつた。そしてこの目的を果たすために、本稿では記憶に焦点をあて、記憶の円滑な働きを妨げる社会のさまざまな変化も含めて考察した。ある状況において、記憶は断片化し、行為の自由は損なわれる。しかしこのような状態は、けっして逸脱的・非本来的な状態として片づけられるべきものではない。不自由なりにも生きられる生活があり、そしてその不自由さ——記憶や行為の“損なわれ方”——にこそ、現代の不確定性が痕跡として残されている。本論において、四人の現代日本の小説家の作品を通して、それらにおける記憶と行為の不確定性を解読することをつうじて、そこに示される現代性を示すことができたのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、記憶と想起を社会学的文脈に最定置し、構築主義的パラダイムを乗り越える新たな社会理論を構想しようとした野心的な試みであり、文学社会学の領域に対しても斬新な視点を提供した点で大きな社会学的価値をもつものである。

本論の第一の意義は、社会学的記憶研究に新しい記憶観を提示した点にある。従来の社会学的記憶研究では、記憶を現在の観点から、他者との関係をつうじて、言語によって語られることによって再構築されると主張する構築主義的なアプローチが主流を占めてきた。あらゆる先験的なもの、本質的事象、実体的存在を疑い、それらが言説によって編制され表象された構築物であると捉える、この認識枠組は、またたくまに近代社会学の理論装置の脱構築を推進してきた。たしかに構築主義的視点によって、記憶研究も前進がはかられた。この記憶観によれば、記憶が通常考えられているように精神的・内面的な現象ではなく、社会関係のなかでつくられることを明快に主張することが可能になった。しかしながらその反面、記憶をすべて言語や関係によって構築される受動的な対象としてしか捉えることができず、記憶が人間の行為や経験にたいして持つ能動的な働きを無視する弊害に直面することにもなった。その結果、この十数年、社会学の分野においては、平板な記憶観が流布していった。それに対して松浦氏の研究においては、記憶が人間の行為や経験にどのような作用を及ぼすか、というスタンスから日常生活における記憶の作用の解明に努め、社会学的記憶研究に新しい記憶観を提示することに成功している。記憶と行為をつなぎ合わせることによって、社会から生じかつ社会に働きかけるという再帰性とそれと連動する不確定性を、記憶の社会学的研究のキーコンセプトとして確立した。これによって本研究は、社会学的記憶研究に多くの新しい知見をもたらしたのである。

本論文の第二の意義は、社会学的視座におけるミクロ的立場とマクロ的立場を接合する新しい理論モデルを果敢に提示しようと試みたことである。

アメリカや日本の社会学では、1960年代以降、社会を統一的に説明しようとする理論が急激に衰退していった。すなわち個々人の行為や意識を分析するさまざまなミクロ・アプローチが増えた反面、マクロ的な観点は弱まったのである。それにたいして西欧では、A・ギデンズやU・ベックなどが、「近代とはいかなる時代か」という問いに真正面から答えようとする議論を展開しており、「近代社会の自己認識の学」という社会学の使命を継承している。たとえばギデンズは、近代性の根本的な特性として「再帰性」reflexivityの概念を、ベックは現代性の根本的な特性として「リスク」riskの概念を位置づけ、それらの概念を基底に据えて、近現代のさまざまな社会現象を統一的に説明しようとしている。

松浦氏の研究は、このような理論的姿勢を批判的に摂取し、個人的記憶を扱いながらも、その現代的な特性を解明し、概念化することに努めている。記憶の様式は、個々人の生活世界のレベルでは多様であるが、しかし、それらを重ね合わせて見ていくことで、それらに共通して「不確定性」indeterminacyが特徴として見られることを発見し、その不確定性を現代

性の特徴として位置づけて理論的に論証した。本論文で考察の対象としたのは記憶であるが、この不確定性の概念自体は、それ以外にも、現代のさまざまな社会現象を解き明かしていくための手がかりとなる可能性を持っている。個々のテキストに埋め込まれた現代性を解明することによって、ミクロな次元の分析をつうじてマクロな次元の考察へ至る理論的なモデルを提示しようと試みた。そのさいの理論的道具となったのが、フロイトとベルクソンの記憶論である。とりわけ松浦氏は、過去から現在を透視するベルクソンの記憶論を重視する。ベルクソンにならって氏は、過去は潜在的な多面体であり、現在はその潜在的な多面体がさまざまに表出する過程として捉えるのである。そこにおいて記憶は、(潜在的)な多面性が揺らぎ相互に浸透しながら変容する不確定性を産出する。その不確定性に依拠して人々が行為を偶発的に組織していく過程に注目することによって、ベルクソンから自立した松浦氏独自の社会学的記憶論のモデルを確立したのである。

本論文の第三の意義は、その文学社会学的貢献にある。日本の社会学研究において、作田啓一、井上俊は、他者（および自己）の捉え難さを突破するために、文学作品をテキストとする独特な文学の社会学を切り開いた。本研究は、この系譜に位置づけられるが、社会的行為の創成をより強調する新たな流れを提唱している。記憶が社会的行為や生の源泉となるさまを、松浦氏は文学作品の読解を通して、本研究の記憶モデルにそって説得的に解析する。たとえば、記憶の切断と断片化のなかで、それらの偶発的・創発的な組み合わせを生のスタイルとする可能性を、後藤明生の作品から、生死、理性と狂気といった二分思考で世界をいったん分割したのち、それらをあいまい化し相対化する生のスタイルを、古井由吉の作品から考察する。さらに成長・発展・成熟という近代の強迫的要請に対して、外世界との因果的なつながりを自覚し介入する行為と記憶のありようを、村上春樹の作品を使って、また記憶と想起の過剰を巧妙に行為創成へと転換するスタイルを、津島佑子の作品を活用して描ききることに成功している。

このように、本研究は、記憶研究を、近代社会の構造と主体の相互作用のレベルで明確に位置づけ、記憶の社会学という世界とその可能性を精密に提示しえた点で、大きな社会学的価値をもっているといえる。

しかしながら、ベルクソンの記憶モデルと重複する、ドゥルーズの記憶論や、ミードの想起論については、ほとんど言及も考察もなされていない。また文学作品をとりあつかう文学の社会学の系譜の学説史研究も十分とはいえない点があるなど、いくつか目配りがかけている問題点が指摘できる。しかしながら、これらの難点を考慮しても、本論文の優れた意義が損なわれることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2004年2月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。